

# 天台学僧信尊について

高橋謙祐

## 一

日蓮聖人遺文の中に、『富木入道殿御返事』(1)と云う真蹟遺文がある。この遺文の系年については、十月一日と明記されているだけで年号がなく、昭和定本遺文は弘安元年に系けるが、弘安二年或は建治三年とも云われ、又文永期の筆とする説(2)もあって、この点定かでない。従って執筆の場所も浮動している。古来、「稟権出界法門」(『常師見聞』)、「常忍抄」(『御書目錄』)とも称せられてきたこの遺文は、富木常忍と了性房なる天台学匠との論争、いわゆる真問問答についての書簡で、常忍が『法華文句記』の「権を稟けて界を出づるを名づけて虚出と為す」の文を挙げて爾前無得道の義を主張したのに対して、了性房は「全<sub>テ</sub>以<sub>テ</sub>無<sub>ク</sub>其<sub>レ</sub>積<sub>ル</sub>」(3)とて天台三大部にはこの文なしと反論し、かくして了性房は屈伏

せられた、その一部始終を日蓮聖人に報じたその返事である。この問答の内容については、遺文にみられる限りにおいては、稟権出界の典拠の有無について、不信謗法の法門、止観の行者の持戒、の三問題に就いて論議され、日蓮所弘の法門を以て第三法門と決し、了性房の敗北を謗法の結果とみなし、止観の行者の持戒については『法華文句』や『摩訶止観』の異同を会通し、伝教の末法無戒によせて本門の戒を密示したものである。この遺文で注目され、論争を通して想起されることは、①この問答を通して間接的ではあるが、広学多聞の了性房を師子王程の日蓮に対して蚊虻の者であって、天台法華宗の者でないこと、②了性房の「不信非謗法」とも「不信者不墮地獄」(4)との論難によせて、「日蓮が法門は第三の法門」であると明言したこと。中古天台の学匠をして自らの学説を第三の法門であると言わしめ、天

台・伝教とも違う立場を明示したのは注意されよう。そして、③「了性・思念をつめつる上は他人と御論候わばかへりてあさくなりなん」⑤とて今後の問答を誠めていること、などがあげられるが、この問答によって弟子の中に幾人かの退転者を出したことは、むやみな論争敵禁の一理由ともなったであらうし、常忍側に信仰退転者を出さしめたほどに性房は大学匠であつたにちがいない。而して日蓮聖人が問答には慎重を来していること、退転者を出さしめたほどの学匠了性房を蚊や蛇の如き者としてそれほどに問題視していかないことは、日蓮聖人が未示の第三法門を以てして中古天台はあまり眼中になつたこと、中古天台は了性房をして天台法華宗ではないことが想定されるのである。

この了性房なる者が武蔵河田谷泉福寺の信尊であると云うのである。信尊は「心尊」とも「真尊」とも書かれるのであるが、了性房＝信尊の最も早くみえるのは中山の本成院日実の『当家宗旨名目』⑥で、下之巻に「了性とは河田谷の真尊上人の事也」と云い、定珍の『日本天台先徳明匠記』⑦にも「河田谷上人……了性房<sup>トス</sup>申」とあつて、共に河田谷信尊が了性房であると記しているのであるが、下つて禅智院日好の『録内拾遺』⑧には

「関東河田谷天台学者、中了性房有<sup>レ</sup>之、今了性、同異未詳」と疑問を投じている。とにかく遺文中の了性房が河田谷の天台学匠信尊であるという確証はなく、ただ前の二書だけがよしとするのみであるが、当時、真間には、元慶五年頃、真言宗より天台宗に転じ、鎌倉時代の盛時まで談義所があつたという弘法寺の縁起を併考すれば、遺文中の了性房を信尊とみてよいのではないか。もしそうであるとするれば、河田谷泉福寺から約四十キロも離れた真間で談義が行なわれたのであるから、その問答はさぞかし大きかつたことと思われ、遺文中の了性房が日蓮を年来誘つていたという記述よりして、これまでに何度か真間周辺に来ていたことが窺われ、またこの頃、下総には大須賀、土木崎や印西等に天台宗主に檀那流の談義所があつたので、了性房なる者もこの間を往復していただのではないかと思うのである。今は、従来の所伝に沿つて、了性房は河田谷の信尊であるとみて、以下信尊の行状をたどつてみよう。

## 二

中古天台の学匠達の事蹟は、中古天台が口伝法門であり、多くの著述が年代の不確実なものばかりで、その為

にその多くが不明であつて、信尊もまたその一人である。さて、その信尊であるが、これまたいろいろな説がある。信尊の伝記に関しては、上杉文秀氏が少しくふれているが(9)、師蛮の『本朝高僧伝』(10)は聖教口伝を参照しておよそ次の如く記している。年少にして幸範に従つて剃髪得度、顕密兩教を受け、天台三大部を能信に就学、後、比叡山に登つて灯明院承瑜にまみえて一心三觀と一念三千の奥旨を伝授、寛元年間に河田谷に精舎を開建して第一世に居し、東叡山泉福寺と号した。盛んに教相を談じて、尊海・海日・朗日・広海の四人の高弟を輩出した、と。師蛮の信尊伝は主に定珍の『先徳明匠記』にみられる伝記を以て大略に終っているが、その他、尊舜の『二帖抄見聞』、『恵心流教重相承私鈔』、上野国青柳の龍増寺談林の高観撰『摩訶止観見聞添註』等にも伝記が一樣ではないが散見され、信尊の著述も併せていまま少し信尊伝の詳細が可能である。

先ずこれらの内、最も早い成立になる、尊舜の『二帖抄見聞』(1)巻上に、

信尊<sup>ト</sup>申一説武州人云也。杉生御弟子能真<sup>ト</sup>範源<sup>ト</sup>兩人御座。範源<sup>ト</sup>師跡相伝付弟也。能信<sup>ト</sup>美濃国須賀川下談義給。時武蔵国足立幸範<sup>ト</sup>律師云人。從<sup>テ</sup>彼能真<sup>ト</sup>受学給。

信尊<sup>ハ</sup>從<sup>テ</sup>彼幸範<sup>ト</sup>学問給。其後河田谷止住<sup>ニ</sup>任給。

とある。これに依れば、信尊の生国に幾説かあったようであるが、信尊は武蔵生国で、皇覚―能真―幸範―信尊の学系にあり、河田谷に止住したのは幸範就学以後のようである。『先徳明匠記』はこれに尊海を加えて相生流五代(12)とする。又『明匠記』には、「大田聖人申。生国駿州人也。心尊為<sup>ニ</sup>侍者一也。武州大田庄。鷲宮学頭也。河田谷上人生国駿河人也。後成<sup>ニ</sup>律僧」。了性房申。戒師黒谷具道上人忠尋也。説道第一也(13)と記され、信尊は大田聖人といわれる者の侍者であり、生国まで合わせ駿州としているのであるが、これは、「師御房悪僧故退出也。相生御弟子成云々。美濃国菅根仁也。故申<sup>ニ</sup>菅根上人一也」から続いている文であつて、原本では心賀の学系にある薩摩法印を説明している様に書かれていて、菅根の仁(人)と駿州の人とは明らかに別人を指している。思うに、『先徳明匠記』と尊舜の伝えるところが同時に、相生皇覚の弟子を示していること、美濃国としていふことから、美濃国菅根の人とは同国須賀川にいた能真を指し、では大田聖人は誰を指すかというに、大田聖人とは武州大田庄鷲の宮の学頭の地位にあつたので通称大田聖人と呼ばれていたやうで、大田庄(14)は武蔵の国

足立郡の一地域であるところから類推して、大田聖人は恐らく尊舜の伝えた足立の幸範であろう。信尊が就学した師の幸範が「義了坊……幸範」<sup>田舎衆</sup>であるとはやはり『明匠記』の記すところで、当時、田舎とは京都に対して東国関東を指すので、少なくとも幸範が生国はともかく関東の人であったことがわかり、幸範の坊(房)号が「義了坊」と称されるから、信尊が幸範に就いてその一字を授かり、「了性房」と名づけたとしても不自然ではない。このように考えると、黒谷具道上人を戒師として律僧了性房と成ったという『明匠記』の記述とは一致しなくなるのであるが、信尊が駿州生国の大田聖人の侍者となつたからとて、生国を駿河とするのは侍者という関係からの誤伝ではあるまいか。あるいは、生国が同じということ、幸範に就いたとも考えられる。『二帖抄見聞』<sup>⑮</sup>は次いでいま一説を挙げて、

信尊本山法師有<sup>ニテケルカ</sup>。為<sup>ニ</sup>関東一見<sup>ニ</sup>下向時。河田谷<sup>近</sup>所草堂有<sup>ル</sup>休居士。其時河田谷殿出合御辺何人問給<sup>ト</sup>。信尊答云。我是山法師天台学匠也。有<sup>ニ</sup>受学人<sup>一</sup>可<sup>ト</sup>成<sup>ニ</sup>天台談義<sup>一</sup>云。無<sup>ニ</sup>左右<sup>一</sup>河田谷殿成<sup>ニ</sup>檀那<sup>一</sup>立<sup>ニ</sup>談義所<sup>一</sup>談義給<sup>ト</sup>。然間信尊弟子。海日。朗日。尊海。光海四人学匠有<sup>レ</sup>之。其外ムネト学匠二十四人在<sup>レ</sup>之。

と。信尊は山門の徒で関東に弘法のため下向した時、たまたま河田谷殿に出合い、後、外護を受けて談義所を建立したと伝える。堅者の称号を有ち、談義を行なえる程の地位にあつて、身辺には常に尊海をはじめ二十余人の学匠がいたというから、すでに広学多聞の大学匠であつたと思われる。『先徳明匠記』は「土佐堅者信尊」<sup>⑯</sup>と伝えている。又、『二帖抄見聞』と同じ頃の成立と考えられる、心賀……実全——豪盛と伝授された『恵心流教重相承私鈔』<sup>⑰</sup>なるものにも、

信尊山徒御座也。而杉生<sup>四人</sup>上足中、美濃国須賀川能信学匠。彼能信御弟子幸範学匠御座。其幸範弟子信尊也。而信尊<sup>(ニ心子)</sup>学文能成田舎下、武州河田谷一間四面堂アルコシヲカケ給フ。折節、河田谷殿有<sup>レ</sup>会フテ、何人ト尋ネ申サル時、我是天台宗学匠也、依所可<sup>レ</sup>住<sup>ト</sup>ノ給フ。其時、河田谷殿大悦我在所ヨリ少シ引<sup>レ</sup>ケテ談所作置被<sup>レ</sup>申。仏法繁昌シテ学匠多ク出来セリ。四人上足。海日・朗日・広海・円頓也。

とあり、『二帖抄見聞』と大同小異の説を伝え、尊舜(一四五——一五一四)在世頃にはすでに右のような信尊伝が一般に伝えられていたことを知り得る。更に、尊舜撰



この系譜は、(21) そのへんの事情を表示したものであろう。この十九通が一時になされず、何回かに亘って相伝され、また大分後世のものと思しき相承も含まれていることは本書を通覧すれば容易に解かり、以下にみる奥書はそのことをよく表している。

十九通の内、一心三観の三重三通の第二重二通の中間に(22)、

仁治元年八月二十七日於中上殿<sup>ニ</sup>伝授<sup>ス</sup>之<sup>ノ</sup>畢。修行用心一昨日於同所<sup>ニ</sup>伝授<sup>ス</sup>畢。

という奥書があり、中上殿とは、大和庄俊範法印御房御事也、との袖書が施され、また一昨日の傍注に、

私云或抄云。師云可大和庄御事。受者証明院弁律師承諭御事也

とある。「私云」とは誰であるか不明だが、書写した者か後人のものと思われるこの傍注に依れば、仁治元年(一二四〇)八月二十五日に「一心三観修行用心抄」、二十七日には「一心三観事」が俊範から承諭へ伝授されたことになる。然るに「用心抄」の表題の下には「初重 河田谷」と明記されており、河田谷信尊伝授を思わせている。又、被接の第二重二通の「被接断位事」の末尾(23)には、

寛元元年正月二十七日重被<sup>レ</sup>示<sup>ス</sup>此<sup>ノ</sup>義<sup>ヲ</sup>畢

とあり、更に、同第三重三通の「被接三重」の終部(24)にも、

寛元元年正月二十七日 行年三十一明円 於中上相伝之畢

という前と同じ奥書を記しており、この奥書には、「是ハ常瑜ヨリ相承スル故ニ常瑜ノ言歟。信尊ノ上洛ノ時ト云事ニテ可<sup>レ</sup>有也」という傍注があつて、寛元元年正月二十七日に被接二重三通の法門が上洛した信尊に中上殿に於いて常(承)瑜より相伝されたと説明している。「被接三重」の本文の末尾には、「此条山上沙汰了。中上之相伝、義大旨畢」というから、この法門はかつて山上で評議された中上の相承である。また、「四句成道文証幽候也。来冬上洛可<sup>レ</sup>申」とて、この時、来年冬上洛の砌、四句成道の法門を約束している。寛元元年云々の奥書の袖書はむしろこの約束を注しているようである。

この寛元元年の相承にしろ先の仁治元年のものにしてもいづれも中上の相承で、この「中上」をば割書は俊範と説明しているのであるが、尊舜の『二帖抄見聞』(25)は、信尊の相承の事情をこう記述している。すなわち、

信尊弟子……学匠二十四人在<sup>リ</sup>之。故未相如何<sup>カ</sup>可有<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>思。俄上洛於<sup>ニ</sup>門跡<sup>ニ</sup>遂<sup>ニ</sup>相承<sup>ニ</sup>被<sup>レ</sup>思召<sup>ニ</sup>問。大和

庄俊範、弟子承瑜。俊承。靜明。經海、四人御座。其中、中上承瑜僧都、对被接、三重并一心三觀等、傳授玉。是名三河田谷十九通。是横相承教行証、分別無之。以之授尊海也。故尊海持言、吾是杉生五代、末弟也、被申也。所謂皇寛。能真。幸範。信尊。尊海也。

これによつて、「中上」は俊範ではなく、承瑜であることが明らかとなり、従つて中上殿は承瑜の坊舎であつて、このとき俊範はすでに大和庄に住していたのである。このことは日蓮聖人の『浄土九品之事』(26)からも明白である。そして一心三觀及び被接三重が俊範から承瑜に、さらに信尊へと伝授され、この相伝は、先の被接三重の「此条山上沙汰了。中上之相伝義大旨畢」と合致する。さすれば、中上殿での伝授は俊範から承瑜の相承ではなく、承瑜より信尊への相伝となり、而して信尊の上洛は法門相承のためであつて、また上洛は信尊が河田谷に止住していたことを裏づけることになる。これらの奥書等によつて、相承は一度になされたのではなく、幾度となく足を運んで伝授されたという相伝の困難なことと型式化とが知られ、同時に「十九通」とはむしろ信尊の時に名づけられたのではなく、のちになつてそのように呼ばれ、尊舜在世頃にはすでに『河田谷十九通』として知られて

いたことが窺い知られよう。相承が門跡で行なわれ、直弟子の尊海もその為に三回とも七回とも伝えられるほど上洛し、その都度高額な金銭等を寄進(27)しているほどである。ここに法門相承の売買されている現象がみられる。ともかく中上殿は承瑜の坊であり、そこに於いて、仁治元年八月二十五、二十七日並に寛元元年正月二十七日に一心三觀及び被接の法門が上洛した信尊に承瑜より伝授されたのである。而して、被接三重の奥書にみえる「行年三十一明円」とは恐らくその時の信尊の年であろう。被接の法門がいかに重要であるかは、信尊が伝授された折に仰せられた、「被接、一科止觀為三円宗」。大切大切」との言より計り知られるが、「被接断位事」には、「被接ノ断位ノ法門。相伝シマイラセ候ヲ。尊海ノ一期ニ補処弟子一人ヨリホカニ。二人マテニオシヘス候。(中略)仍起静文帖如件。弘安八年二月十八日敬白 尊海判」と記す「立申円頓頼房尊海起請文事」(28)があり、被接の法門が弘安八年(一二八五)に信尊から尊海に唯授一人され、寛元元年を三十一歳とすると、この時信尊は七十三歳、尊海三十二歳の相伝となる。尊海のこの三十二歳伝授を類推すると、信尊の三十一歳の承瑜相承も十分に考えられる。

『昭和現存天台書籍綜合目録』に『類聚集』一卷、千觀の『義科目録』(内題「教相義見聞」)なる典籍が収録されていて、前者本文中に「弘安九年十一月廿六日 伝授之信尊」(20)と記され、又、内題下書に永仁三年(一二九三)五月九日より著述を始めたという千觀の『義科目録』には、本文の初の「信尊仰云…」(20)とあるということをも以ってせば、すでに信尊の没していることが思われる。信尊が檀那流の法門をも伝えていたことは、『先徳明匠記』に長耀の松林房流に名を列ねている(21)ところ、十九通相承にも檀那流の義がみられ、慧檀兩流が混在している。加えて、文明二年、行学院日朝書写の『一流相伝法門見聞私』(22)に、信尊が慧心流の教の七箇相伝を受け、それを尊海に伝えたことの図表があるが、「仙波信尊」と明記されているのは口伝によって記されたものか、或は信尊と尊海との師弟関係よりして晩年に信尊が仙波に住したことを意味しているのか、この点不明確ながらも他書の記す相承より具体的にあって注意されるところである。もし信尊にすでに伝法四箇略伝三箇の七箇相伝がなされていたならば、尊海がこれを受ける為わざわざ苦勞して上洛することもなかったであろうが、尊海は三度或は七度上洛し、幾多の懇志を尽して心賀より

七箇法門が授けられている(23)ので、日朝の記す七箇法門の信尊への相伝はまだなされていなかったのではないかと思う。七箇法門は慧心流嫡流の相承であるが、信尊は同流の嫡流ではなく、幸範、承瑜からつづく傍流であり、嫡流は俊範―静明―心賀であったので、尊海は心賀の相承を受くべき幾度かの上洛をしたのである。『先徳明匠記』は「…尊海御上洛。正親町法印奉<sub>レ</sub>値。七箇御相承有<sub>レ</sub>之。此時始七箇下<sub>レ</sub>也」(24)と伝えている。

### 三

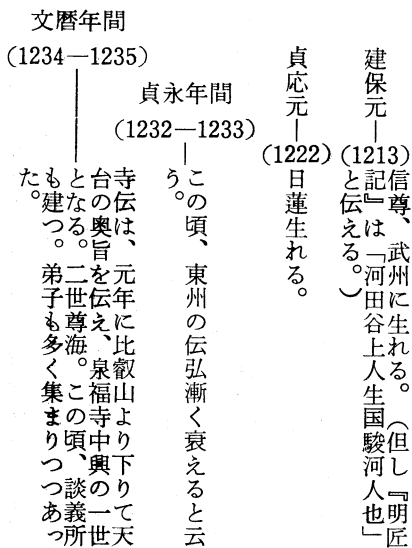
如上の諸説を綜合すれば次の様な信尊伝が可能である。

河田谷泉福寺は天長六年慈覚大師の創建にして、信尊當時武蔵国に於ける天台宗の中心的位置にあった。信尊の生年は、先にみたように寛元元年が三十一歳であるから、承元三年(一二〇九)であり、示寂は、『類聚集』を伝授した弘安九年十一月から信尊の名がみえる『義科目録』書写の永仁三年の間と考えられる。生国は『明匠記』は駿河と記すが武州河田谷からそう遠くではあるまい。いつ頃出家得度したかは不明であるが、得度したのが天台宗寺院であるのは確かだ、義了房幸範が田舎衆足



立の者というから幸範は河田谷から近い太田庄鷲の宮の学頭職にあったか、或はその談義所にいたか、極言すれば泉福寺に住していたとも考えられ、信尊が彼に就学したとなれば、信尊は幸範について鷲の宮の談義所で出家得度したのではないか。幸範と信尊との生国が同じ駿河とする『明匠記』の記述はこれに積極性を持たせしめてくれる。相生皇寛の学系をひく能真に学んだ幸範に就いて天台学を学んだのであるが、志すところあって比叡山に登り受戒、律僧として大いに研鑽、天台の奥旨をきわめ、東州の伝弘衰えるとは幸範の没したのを意味するか、貞永の頃、東州関東の天台学衰退し、従って、山門の徒、土佐堅者と称された信尊は下向を決意(信尊の下向を、日蓮聖人が叡山より清澄寺に帰ってきたことと思ひ合せ、信尊も出家した処にもどったとも考えられる)、文暦のはじめに鷲の宮か泉福寺にもどりて中興の祖となる。仁治元年頃までには領主河田谷の殿の深い帰依を受けて談義所を建立、尊海をはじめ主なる弟子二十四人を数え、教学隆盛をきわめるが、弟子二十余人をもつていまだ未相承であったので、法門の相承を望んで上洛、仁治元年八月二十五日に「一心三観修行用心抄」を、二十七日には「一心三観事」の慧心流義相承を灯明院承瑜より受け、

寛元元年正月にも上洛、二十七日に「被接断位事」「被接三重」の法門を承瑜より相伝、この時、来年冬再上洛の折、「四句成道」の法門相承を約束する。このころ、法門伝授の為に年ごとに上洛していたのではないだろうか。仮に弘安元年の十月一日を真問問答としても、その頃には、広学多聞と評されるほどの関東天台の一大学匠の地位にあったとしても不自然でない。而して弘安八年二月二十八日、被接の法門などの法門を尊海に相伝、變つて尊海が関東天台の中心となるに至ったのである。信尊の行状を图表に示すと次の通りとなる。



仁治元—(1240)上洛、「一心三観修行用心抄」「一心三観事」を承授より行授。(28歳)

寛元元—(1243)上洛、「被接断位事」「被接三重」を承瑜より相伝、来冬上洛の約束をする。(31歳)

建長五—(1253)尊海生れる。日蓮、清澄寺で法華信仰の勸奨を行なう。(32歳)

弘安元—(1278)富木常忍と真間で論争。(66歳)

弘安八—(1285)尊海(32歳)に法門を伝授。(73歳)

弘安九—(1286)類聚集を伝授さる。

この間に死去せし  
—弘安九—(1286)類聚集を伝授さる。  
—永仁三—(1295)「信尊仰云…」とある。

以上、信尊の著述内容にはあまりふれず、主に事蹟を中心に、信尊の歴史的位置を考察してきたのであるが、日蓮聖人が天台法華宗の者でないこと批判した了性房信尊の行状の確定は、日蓮聖人当時の中古天台を考える上で、一基点となるのではないかと考えたからである。今のところ遺文にみられる了性房なる者が河田谷信尊であると

云うのは先の二書だけで、それ以前の確証はない。又、その了性房と信尊が同一人物であるという古来の説を否定するものもない。筆者はむしろ積極的に同一人説を支持するものである。信尊の相承の師が俊範の弟子の一人承範であることからみれば、当時の比叡山の教学の中心的人物は俊範の上足四人(38)といわれた人達であったという推測も可能となってくる。尊海が相承を受けた師は静明の上足の心賀であった。又、長享二年五月十八日西山本門寺で模写して妙蓮寺日眼より日憲に伝えられ、永禄二年正月に要法寺日辰が重須本門寺で日出の懇志を得て書写、更に永禄六年日璟が転写した、「本云右此抄者自日興上人日順被承候処、法門、聞書也」という奥書のある『従開山伝日順法門』なる著述に斯様な記述がある。即ち、「本迹不同事」(36)を説く項に、

本迹、雖殊不思議一ト云如何、答相伝云本迹二法、異本有修得、不同也、只不思議一ト云者本門、意ニテ開近顕遠シヌレハ、迹門理ノ当体全、本門也、此時不思議一ト云也、故不思議一ト云ヘトモ本迹理一ト云ニハ非ス、本迹ト立ル面ニテハ本迹二ノ不同ハ無疑事也、(中略)、穴賢穴賢可秘可秘、自静明法印一ト云也。

と。本迹不同義に静明の口伝を掲げ、答云相伝云の箇所

には「高祖静明ヨリ御伝大事」という袖書がなされ、高祖日蓮は静明より法門を伝授したというのである。俊範は法然と同学であったとも伝えられ、さらにまた、後世のものと思われるが、十九通の一つに「止観修行用意事」(37)という切紙相承があり、そこには、

……於三相伝有三種。一慶増権大僧都授三舜海一心三観脈譜観境相不レ書口伝云。二黒谷聖人一心三観立三十重等。大和荘止観大体不レ違。三……

とあって、黒谷聖人のところに「法然」との傍注がなされていて、黒谷聖人法然の一心三観説を大和荘(俊範)のそれに対応させてあげている。いづれにしろ、日蓮聖人が比叡山に在った頃、俊範(一一二二一)が叡山三塔の総学頭の地位にあって大和荘に住していたことは確実である。

『真間山血脉事』にみえる、室町時代に出た叡山学僧の円信の『破日蓮義』にみられる日蓮聖人の叡山での師に関して提示された、「宗祖師ニ心栄ニ学ニ台教ニ歟、又師ニ心尊ヲ学ニ台教ニ歟」(38)の問題は、以上の考察で否定できるだろう。

註

(1) 定遺一五八八頁

(2) 最も早い文永説をたてるのは六牙院日潮の『本化別頭仏祖統紀』であって、卷十の富木常忍伝には性房との論争を文永元年としているので、これに従えば文永元年となる(『日蓮宗全書』二二三頁)。建治三年説は日蓮の『境妙庵書目録』(定遺二八一〇頁)、日諦撰『祖書目次』(定遺二八一八頁、同箇所「聰本文永三年ニ系ス」という割書きがある)、日明の『新撰校正祖書目次』(定遺二八三〇頁)等の目録で、弘安二年に系けるのは、興門系の日騰撰『新定祖書目録攷異』(定遺二八四〇頁)である。山川智忠氏は花押の検討より弘安元年以後と主張(『日蓮聖人研究』二卷)し、更に鈴木一成氏は花押の骸手の変化と大進房の退転の経緯より弘安元年と定めた(定遺は氏の研究に従って、弘安元年とした)。塩田義彦氏は諸目録等を支持して建治三年説である(『日蓮聖人御遺文講義』十七卷三七五頁)。通心院日境の書写した『真間山血脉事』に採録されている「真間山弘法寺伝灯記」に弘法寺の縁由を了性房と常忍との問答にありとし、その時の日蓮聖人の返事を『稟権出界抄』といい、この著述の年代を『旧記』によって、「建治三年丁未歳」としている(『日蓮宗宗学全書』二十三卷、一七〇頁)。なお、『真間山血脉事』の表紙裏書に「応永廿四年」とみえ、大分早い成立と考えられる。この書に、心栄―心尊―尊海の血脉を付すところは他書

と特異とするところで、「武州心尊法印開闢寺」(其頃の釈か)とあり、心尊の河田谷泉福寺開創を思わしている。

(3) 定遺一五八八頁

(4) 定遺一五八九頁

(5) 定遺一五九一頁

(6) 本満寺編『日蓮聖人伝記集』五五三頁『宗旨名目』は著作年代不明であるが、寛正二年(一四六一)とされ(望月敏厚『日蓮宗学説史』、執行海秀氏は文中に応仁元年の記述よりそれ以後と問題提起している『日蓮宗教学史』)、日実の学系は日中―日源―日実と次第され、これらの人達の教学が中古天台思想に立脚していることから、何らかの型で中古天台と交渉を持っていたと考えられ、従って日実のこの説は当時いわれていた説を取り入れた結果とも思われる。

(7) 大日本仏教全書一一一巻、二七三頁

(8) 日蓮宗全書所収、三六〇頁。因に、弘経寺日健の『御書鈔』下巻は、「富木ノ常忍ノ近所ニ天台ノ学者一院アリ。其時院主ヲ了性ト云タリ」(日蓮宗全書所収、一四四五頁)と、日潮の『本化別頭仏祖統紀』巻十は、「…香花之地有真間山弘法寺ニ天台宗談林之化主権大僧都法印了性…」(日蓮宗全書所収、二二三頁)と記し、これを受けて、浅井要麟氏は、真間弘法寺の前身常忍の香華院の学頭了性房であると解説している(『日蓮聖人遺文全集解題』二八六頁)が、塩田義彦氏は了性房の院主説を否定する(前掲書三九二頁)。

享徳元年頃の妙泉院日晴の作なる『当家諸間流継図之事』に「弘法寺ハ叡山ノ末寺ニテ昔ハ七堂アリ、毎年叡山ヨリ学者来テ仏法執行アリ、或時叡山ノ了性坊来テ八月ノ彼岸ニ法談ス」(『日蓮宗学全書』十八巻、一四四頁)とあり、真間問答以前にも了性房が真間に来ていたことを記し、ここでは了性坊を叡山の徒としている。

(9) 上杉文秀『日本天台史』四七五頁

(10) 大日本仏教全書一〇二巻、二二二頁

(11) 天台宗全書第九巻所収、一六〇頁。巻上は、明応十年辛酉十月二十七日の起請文事があつて、成立はこれ以前である。

(12) 大日本仏教全書一一一巻、二七四頁

(13) 大日本仏教全書一一一巻、二七三頁

(14) 武州大田の庄鷲の宮は、久喜の北四キロ、南埼玉郡(今日)の最北に居り、古利根の西岸にあたる。

(15) 天台宗全書所収、一六〇頁

(16) 上杉文秀『日本天台史』統篇所収、八二三頁。本書は、尊辨の『二帖抄見聞』と同意の所有り。

(17) 大日本仏教全書二九巻、一頁

(18) 信尊を以て天台慧心流の初伝とする説には今日異説がある。即ち、裕慈弘「所謂中古天台の関東伝播に就て」(「大崎学報」八十八号)及び「慧檀両流の関東伝播」(『日本仏教の開展とその基調』下巻)。

(19) 大日本仏教全書一一一巻、二七八頁。

- (20) 田島德音氏は、『十九通』は尊海の手に伝えられたもの様であるが、実際はもっと後の編輯であろう(「河田谷十九通について」山家学報一卷四号)、と論じ、近時、田村芳朗博士は、切紙相承が尊海あたりで成文化したのではないかと(同著『鎌倉新仏教思想の研究』四三六頁)と述べている。
- (21) 天台宗全書九卷所収、九三頁。
- (22) 天台宗全書九卷所収、九七頁。
- (23) 天台宗全書九卷所収、一一四頁。
- (24) 天台宗全書九卷所収、一一六頁。
- (25) 天台宗全書九卷所収、一六〇頁。
- (26) 定遺二三一〇頁。
- (27) 『二帖抄見聞』(天台宗全書所収)、島智良「円頓法印尊海」(大崎学報八号)参照。
- (28) 天台宗全書九卷所収、一一六頁。島智良前掲論稿参照。
- (29) 渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』上巻、三二四頁。
- (30) 渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』上巻、二一〇頁。天台宗全書二十三巻に千観の『義科目録』を収めてあるが、単に義科を图示しているだけで、「信尊仰云…」は見当らない。全書所収本とは異本か。
- (31) 大日本仏教全書一一一巻、二七六頁。
- (32) 日朝『一流相伝見聞私』表紙。『昭和現存天台典籍目録』参照。
- (33) 『二帖抄見聞』(天台宗全書九卷所収、一六〇頁)、『恵心流教重相承私鈔』(『日本天台史統』所収、八二四頁)。
- (34) 大日本仏教全書一一一巻、二七八頁。
- (35) 俊範の高弟四人とは、灯明院弁律師承瑜、花林坊俊承、粟田口静明、毘沙門堂僧正経海(『先徳明匠記』大日本仏教全書一一一巻、二七七頁)である。
- (36) 日蓮宗宗学全書第二巻、三八五頁。
- (37) 天台宗全書九卷所収、一〇五頁。
- (38) 日蓮宗宗学全書第二十三巻、一六七頁。